

追ひかけて来る思ひ出がいつもある夕陽は父の胸の

匂ひだ 北久保まりこ

幼いころの思い出だろう。父に抱かれた、あるいは抱き留められた思い出である。下句、旧カナ・口語の採用で、奇妙な味を出している。

黒鮋くろさわが泳ぐを真昼に眺め居り結末の無き映画の如く

高橋秀

の歌のようである。黒マグロはいわゆる本マグロ、三メートルにもなる大型のマグロである。マグロは死ぬまで一生休むことなく高速で泳ぎ続けるという。大水槽を泳ぎつづけるマグロの迫力。

丈高き福木の並木の白い道牛車にゆられゆく夏の午

後 比嘉弘子

「福木」は二十メートルにもなる常緑樹で、強風に耐えるということで、沖縄ではよく街路樹になつてている。「白い道」は砂地なのでじっさい白く見えるのだろうが、一首中では、シンボリックなイメージでうまく位置をえている。

真夜中の街が薄暗く写り込むマネキン照らす明りが

消えて シヨウインドウの大型ガラスである。昼間や内側に

明かりがあつた時とは全くちがう見え方である。「街が薄暗く写り込む」は、工夫された表現。

アメリカへのフライト四時間遅れたり大出遅れの新

婚旅行

大津貴寛

新婚旅行の歌として、なんともユーモラスでとぼけた味わいがうれしい。実際を踏まえているのだろうが、「大出遅れの新婚旅行」という表現は、自己客観化、自己相対化がはたされているからこそ、ユーモラスな味わいが出るのである。

いくつもの文化文明溶け合つてシチリアの空いつの世も青

中根猛

シチリア旅行の一連中の作。シチリアは古代ギリシャおよびローマの支配下にあつた時代から、「いくつもの文化文明」が入つてきて溶け合ってきた。結句へのつかずはなれずの微妙な展開に注目。

そろそろを腰の高さに泳がせて再婚したての美魔女

花美月

「薔薇ばらもはや似合はぬ齡」の数人が会食し、おしゃべりで盛り上がりつてゐる場面。「そろそろを腰の高さに泳がせ」という表現が見どころ。口で言えば、「私はそろそろおいとましまなくちゃ」といったところ。

サナギから蝶あらわれて三歳はかわいそだねと息

つめていつ 駒田晶子

三歳の子の目に、蝶の変態がどううつったのか。私たちは馬の分娩や蛇の孵化をはじめて見ると近い感覚なのだろうか。見つめていた何分かかる沈黙の時間があつて、その後の「かわいそだね」である。その沈黙の時間が読めるところがポイント。